

南アルプス井川の言語と文化を継承するための研究調査

谷口ジョイ・山岸祐己（静岡理科大学 情報学部）

1 研究の背景

南アルプスの玄関口とされる旧井川村（現・静岡市葵区井川）は、周辺の地域から地理的に隔絶されていた「言語の島」である。中部地方では唯一の無アクセント地域であると言われており（秋永，1986）、動詞語頭のハ行音がバ行音になる（例：走る→パシル）など中部方言とは異なる音韻的特徴をもつ（岩井，1941）。また、語彙・語法にも古語の残存が見られ、学術的にも注目を集めてきた。その一方で井川方言は、その話者が激減し、深刻な消滅の危機に瀕している（谷口・山岸，2025）。この数十年で、日本国内における消滅危機言語・方言の「記録保存」は進展した一方で、「継承保存」の取り組みは遅れており、井川方言の継承についても、十分になされていない。

本研究の目的は以下の2点である。

- [1] 旧井川村の方言について、記録・保存・アーカイブ化を行うことで、研究者だけではなく、地域が利用可能なリソースとし、研究成果を地域に還元することを目的とする。談話資料・語彙集・オンライン辞書を整備し、地域コミュニティが活用できる資料として公開する。
- [2] 衰退・消滅の危機にある大井川上流域の井川方言について、地域コミュニティの高齢者と若年世代が交流する「場」を創出し、「話者を増やす」直接的な継承保存の実践を行う。本研究は、2024年度の前身プロジェクト（記録保存）を発展させ、記録保存と継承保存が螺旋的に進む持続可能な言語保存モデルの構築を目指す。

2 研究の方法

井川方言の継承・保存に向け、以下の4つのアプローチで研究を進める。

- ① 談話資料の蓄積：収集した昔語りの音声をリポジトリで公開するとともに、子ども向け紙芝居の制作や自然談話の録画・ウェブ公開を行う。
- ② 辞書の編纂：収集済みの語彙に例文を加えたオンライン辞書を整備し、2025年度中に「日琉諸語オンライン辞書」へ井川方言データとして追加・公開する。
- ③ 方言使用の「場」の創出：学校の放課後時間や老人会への訪問を通じて、高齢者と若年世代が交流する機会を設ける。
- ④ 研究成果の発表：学会発表・論文出版に加え、地域住民向けのワークショップ・シンポジウムを開催し、方言の保存・継承について広く共有する。

3 研究の成果

① 談話資料の蓄積

フィールドワークにより自然談話を収集し、文字化した上で、動画を公開した。また、子ども向け紙芝居「カンス沢の古猫」を制作した。老人会「いっぷく会」や小学校との活動の中で紙芝居の読み聞かせを実施し、高齢者と子どもが方言を通じて交流する場を設けた。

② 井川方言オンライン辞書の編纂

若年世代の自学自習を支援する『井川方言 基礎語彙集』（右図参照）を制作した。また、国立国語研究所の危機語リポジトリに音声データを追加した。さらに、各語には、地域の高齢者と協働して「井川らしさ」が反映された例文を付した。

③ 言語使用の「場」の創出

井川小中学校の放課後活動において、児童が絵を描き、井川方言でカルタを制作する活動を実施し、新たな言語使用場面を創出した。また、老人会「いっぷく会」を小学生と共に定期的に訪問し、高齢者から民話や、かつての井川村の様子を聞く場を設けた。2025年6月および12月には「井川昔語りの会」を、それぞれ静岡理科大学静岡駅前キャンパスおよび井川支所にて開催し、冊子『再話・井川の昔話』を配布した。



4 研究の意義と展望

上記の研究活動を通じ、辞書・資料が継承を支援し、継承活動が記録を充実させるという螺旋的な記録・継承保存の実践を着実に進めることができた。研究者と地域コミュニティの双方向連携による持続可能な言語保存モデルの構築に向けて、引き続き取り組みを進めたい。